

第3 問題作成部会の見解

世界史 A

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問

第1問は、世界史上の「モノや習慣」をテーマとし、Aは内陸アジアの遊牧民、Bは20世紀のアジアやアフリカにおける政治指導者たちの服装、Cは中国の纏足について解答させる問題である。

Aでは、遊牧民族の歴史資料に見られるモノのやり取りを扱う授業場面を取り上げて、問題文から読み取った内容と、世界史で学んできた知識とを関連付けて考察する力を問うた。具体的には、モンゴル帝国・ティムール朝時代の陶磁器の流通を素材として取り上げた。いずれの小問についても共通テストの問題として適切なものであった。

Bでは、20世紀のアジアやアフリカにおける政治指導者たちの服装を題材とした授業の場面を取り上げ、その背景となる綿の歴史、近代化などについても考えさせることを意図して出題した。

Cでは、纏足に対して中国内外の人物が言及した資料を素材とし、それら資料から読み取った内容を踏まえて、清代の歴史と纏足の広がりについて考察する力を問うた。具体的には、中国の知識人が纏足について記した資料と、纏足運動を展開したイギリス人が著した資料を取り上げた。

第2問

第2問は、「歴史上の国民や国家」をテーマとし、Aは「国民」という語の概念史、Bは中国の国名について解答させる問題である。

Aでは、ナチ党の党名と国民との関係について述べた書籍を素材とし、近現代における国民をめぐる世界史上の出来事について、世界史で学んできた知識と図像などを関連付けて考察する力を問うた。いずれの小問についても共通テストの問題として適切なものであった。

Bでは、梁啓超の「中国史叙論」を取り上げ、「中国」という国名に関する梁啓超の考え方と、彼の考えの根拠となった歴史的背景として中国と異民族との関係に注目して問題を作成した。

第3問

第3問は、「20世紀を動かした政治家」をテーマとし、Aはレーニンとケレンスキー、Bはムソリーニ、Cはチャーチルを取り上げて、20世紀の各国の政治史や国際関係史についての理解力を問うことを意図して問題を作成した。

Aでは、帝政期のロシアで活躍したヴァイオリニスト、レオポルト＝アウアーが、ロシア革命について回想している部分を資料として取り上げた。

Bでは、ムッソリーニの記した自叙伝を資料として取り上げた。その意図は、ムッソリーニの自叙伝の内容を、主に二つの世界大戦に関する知識と関連付けて考察する力を問うことであった。

Cでは、海外旅行時のガイドとの会話を題材に、戦後のヨーロッパを中心とした国際情勢について、会話文の文脈から捉えられる該当の人物や出来事を踏まえ、その内容を考察する力を問うた。いずれの小問についても共通テストの問題として適切なものであった。

第4問

第4問は、統計資料を題材とし、Aでは近現代の世界経済の歴史的变化、Bでは植民地期のアフリカ経済について、グラフや表の読み取りに基づいて解答させる問題とした。

Aでは、長期間に及ぶ世界の大陸ないし地域ごとの経済の推移について、人口に着目してまとめた表と、世界経済に占める地域ごとのGDPの割合の変化を示したグラフを取り上げた。

Bでは、西ヨーロッパ諸国の植民地であったアフリカ4か国（ガーナ、タンザニア、アルジェリア、アンゴラ）における輸入額の推移を、主要貿易相手国別にまとめた各国グラフを資料として取り上げ、植民地と宗主国の経済的な結び付きとグラフの読み取りを問うた。いずれの小問についても共通テストの問題として適切なものであった。

3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問

Aの問2は包括的知識を問う良問という評価を受けた一方、トルコ系民族が世界史に与えた影響に発展させる可能性を指摘された。選択肢となる説明文の関連性をより高める工夫をしていきたい。問3は思考力・判断力・表現力等を問う良問であるとの評価を受けた。

Bは全体的にバランスが取れていたといえる。また問6が、思考力・判断力・表現力等を問う良問との評価を受けた。

Cの問9は、資料から読み取った情報と知識を踏まえた上で推論を求める、思考力・判断力・表現力等を問う良問であるとの評価を受けた。

第2問

Aの問1は、歴史資料の中の「国民」をリード文の情報を利用しつつ解く問題であり良問という評価を受けた。問2は図像をもとに「国民」をめぐる歴史を考えてもらう問題であり、良問と評価された。問3はナチ党の台頭を答える年代を答える問題になっているが、知識を用いて選択肢は絞れるものの、やや難問との評価を受けた。また、プロパガンダの利用そのものを思考させる問題にできるのではないかと指摘もいただいた。今後の課題としたい。

Bでは、問5について資料の読み取りを踏まえ、「中国」という語が持つ相対性に着目して考察させ、概念的な理解へと至る良問、問6は、列強による中国分割が進んでいく中で、ナショナリズムが強く意識されていたことに気づかせる良問とそれぞれ評価を得た。問5には、正解以外の選択肢が全て誤文であり、事実に基づく知識だけで解答することができた点に改善の余地が残るとの指摘もあり、その点は留意する必要があるものの、問題形式、内容において適切であったと考える。

第3問

Aでは問2に関して、「資料を丁寧に読み取った上で、ロシア革命に関する知識を踏まえて、ボリシェヴィキに対するアウアーの評価について考察することを求める、思考力・判断力・表現力等を問う良問である」との高い評価が得られた。今後も、こうした問題作成を心がけたい。

Bでは問4（二つの世界大戦に関する包括的知識を問う問題）と問5（イタリア統一に関する包括的知識を問う問題）に連動性があることが評価された。今後も、小問同士の連動性を意識した問題作りを進めたい。

Cでは、問8について、問われた知識同士の関連性を高める工夫があれば包括的知識を問う問題となり得たとの指摘があった。この指摘については、今後の問題作成に役立てたい。一方、問9については、地図を配列することで地理的理解も含めて問うという点で、知識・技能を問う良問との評価を受けた。

第4問

Aの問3は、グラフから立てられた問いと、問いに対する仮説中の空欄に入れる二つの語について正しい組合せを選択する問題であり、グラフの読み取りや知識を踏まえつつ、論理整合性を基に仮説の根拠について推論を求める、思考力・判断力・表現力等を問う良問と評価された。今後も、こうした出題を心がけたい。

Bのいずれの小問も基本的な世界史あるいはアフリカの歴史の知識を基に、グラフを読み取る技能が要求され、各問題における思考力・判断力・表現力等を通して、最終的にアフリカにおけるポルトガルの植民地を推論することを求める点で良問であり、小問同士の連動性が高い点も評価された。また、場面設定が探究活動の良い事例になっていることで、高等学校現場への良いメッセージになっているという評価も得た。今後とも、こうした問題を作成するよう心がけていきたい。

4 今後の問題作成に当たっての留意点又はまとめ

以上、問題作成部会として、各問の出題意図と、設問に対して寄せられた意見・評価に対する見解を述べてきた。最後に総合的な意見・評価についての問題作成部会の見解を述べ、問題作成に当たっての留意点についてまとめておきたい。

まず分量としては、受験者が余裕をもって時間内に解くことができる適切なものであると評価されたが、今回のものを一つの基準として適切なバランスの問題作成を継続すべきとの要望があった。難易度については、大学入学希望者の学力を測る上で標準的であったとの評価であった。

出題のバランスについては、地域別では、ヨーロッパ・アメリカが46%ほど、東・内陸アジアが27%ほどで、合わせて7割を超えた。分野別では、政治史と社会経済史があわせて9割ほどと大多数を占めた。時代別では、近代以降が7割弱、複数時代の混合問題が2割強となっており、古代・中世・近世にかかわる問題は計3問に抑えた。全体として内容については、学習指導要領・教科書の範囲内で問題を作成したことは言うまでもないが、とりわけ地域別・分野別の偏りは科目の特性上やむを得ない部分もある。

全体的に、「思考力・判断力・表現力等を問おうとする意欲的な出題が随所に見られ」、単純な暗記学習では対応不能な問題となっており、歴史的事象についての包括的知識や概念的理解、資料から必要な情報を読み取る技能、および事象相互の関連を多面的・多角的に考察させるような良問がバランスよく配置されているとの高い評価を受けた。「新たな知識を獲得していくプロセス」を設問として提示し、かつ高等学校の世界史教育における授業改善へのヒントになりうる問題作成を実現することができたことは、本部会の改善努力が実を結んだものであり、今後とも継続していきたい。

「世界史A」の学習指導要領・教科書のテーマに即した問題作成に細心の注意を払ったことは言うまでもないが、さまざまな指摘・意見をふまえつつ、単純な知識問題に帰結することなく、基礎的な歴史知識を活かした歴史的思考に基づいて解答できるような、受験者の思考力・判断力・表現力等を測定しうる設問を考案するよう、今後とも問題作成の改善に努めたい。

世界史 B

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問

第1問は、「世界史上の女性の権力者」をテーマとし、Aは欧米における、Bは中国における女性の活躍を切り口として、その背景と歴史的展開を考えさせることを意図して問題を作成した。全般的には妥当な問題であった。

Aでは、欧米における女性の活躍を素材とし、近代における世界史上の出来事について、世界史で学んできた基本的な知識と読み取った内容とを関連付けて考えさせることを意図して出題した。いずれの小問についても、共通テストの問題として適切なものであった。

Bでは、中国観光の際に、中国の歴史に登場した女性についてガイドと話題にしている場面を取り上げた。そして、会話文の文脈から人物を特定するとともに、その人物に関連する歴史的事象について基礎的な知識を理解しているか、考察する力を有しているかを問うた。また、会話文と問いかけ文に示された時代における歴史的事象についての基礎的な知識についても問うた。

第2問

第2問は、「世界史上の君主」をテーマとし、Aは中近世のハンガリー王国、Bはヴィジャヤナガル王国、Cは中世のフランス王国における君主とその統治について解答させる問題である。

Aでは、中近世におけるハンガリーの国王と議会との関係についての文章から読み取った情報と、世界史で学習した知識とを関連付けて考察する力を問うた。

Bでは、南インドのヒンドゥー教徒の王家が支配したヴィジャヤナガル王国が、イスラム圏の国々とどう関わり、イスラム文化をどのように取り入れていたのかについて述べた解説文から、イスラムに関する知識とインドの歴史的事象とを結び付けて思考させる意図で作問した。いずれの小問についても、共通テストの問題として適切なものであった。

Cでは、シャルル7世が発布した王令を資料として、王令の内容を読み取り、この王令が発布された背景とこの王令が後の時代に及ぼした影響について考えさせることを意図して出題した。

第3問

第3問は、「人の移動の歴史」をテーマとし、Aは朝鮮の朝貢使節、Bはヴェネツィアを中心とする人の移動について解答させる問題である。

Aでは、朝鮮の朝貢使節の移動経路を題材として、古代から近代にかけての中国・朝鮮の歴史を問うた。

Bでは、ヴェネツィアを中心とした地中海世界の地図と解説文を題材に、地図の読み取り能力と歴史的・地理的知識の理解を包括的に問うことを意図して作成した。

第4問

第4問は、歴史資料の作成者の生きた時代や立場をテーマとし、Aはイギリス人官僚の著作、Bはヨーロッパの知識人による著作について、著者の意図や、著者そのものに関して解答させる問題である。

Aでは、19世紀のイギリス人官僚の著作を素材として、アフガニスタンをめぐる英露の対立を中心に、著作から読み取れる内容と、世界史で学んできた知識とを組み合わせ考察する力を問うた。具体的には、アフガニスタン情勢に関するカーゾンの著作と、その解説文が資料になっていずれの小問についても、共通テストの問題として適切なものであった。

Bでは、モンテスキューの『ローマ人盛衰原因論』を取り上げ、その内容を読み取る力と、それに関連する古代ローマや18世紀の啓蒙思想に関する知識を問うた。いずれの小問についても、共通テストの問題として適切なものであった。

第5問

第5問は、「世界史上の人権侵害や差別」をテーマとし、Aはナチ強制収容所、Bはアメリカ合衆国の歴史における差別について解答させる問題である。

Aでは、ダッハウのナチ強制収容所を見学した学生の会話をもとに、近現代における独裁体制の概念、人権の歴史、そして虐殺の急進化について考察する力を問うた。問1と問3では読み取りをもとに正解を導くよう問題を作成した。また、問2は主に内容的な理解を問うた。いずれも、妥当な難易度であったと考える。

Bでは、米西戦争とその後のアメリカによるキューバ軍政を素材とし、19世紀後半のアメリカ史および世界史に関する知識と概念的な理解を問うた。具体的には、キューバ軍政を批判する風刺画を用い、会話文からその背景の検討に導いた。いずれの小問についても、共通テストの問題としておおむね妥当であった。

3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問

Aの問3に関しては、選択肢の人物に関する単純な知識ではなく、「君主でもその配偶者でもない女性」を概念化した上で正解にたどり着くという問題構成が良問として高く評価された一方で、問1に関しては、知識・技能を問う問題として「事実的知識だけで解ける問題」という評価であった。問1もリード文中の空欄の人物を特定し、その事績を全て正命題の選択肢の中から選ぶという思考プロセスを求めるものであった。リード文と設問をより有機的に結び付け、中間全体としてのまとまりを意識した問題作成を心がけたい。

Bの問6は、八・一宣言から西安事件に至る歴史事象に関する背景などの包括的知識を問う点で良問であり、さらに複数の資料から適当なものを選択するなど、技能を問う点でも良問であるという評価を受けた。一方で、問5について「実権を持ち始めて以降の時期」が指す時期がやや分かりづらいという指摘を受けた。受験者に分かりやすい表現を工夫したい。

第2問

Aの問2については、事実的な知識を問う問題となり、また選択肢がリード文との関連性がやや薄いという評価を受けた。問題作成の際には、リード文と選択肢との関連性について様々な工夫をしていきたい。問3は、文章から読み取れる内容と、空欄に入れる人物について知識との組合せの問題となっている。技能が求められる問題となっており、良問であると評価され

た。

Bの問4については、三つの歴史的事象と解説文の相互の関連がもう少し明確になると、文章を活用した思考力・判断力・表現力等を問う問題になったのではないかと指摘があったので、今後の問題作成で改善したい。また問5については、空欄と下線部の相互の関連性がもう少し明確になると、南アジアや東南アジアに関する社会的状況についての包括的な知識を問う問題になったのではないかと指摘があった。問題が単純に知識を問うものになっているので、今後工夫していきたい。その一方で問6については、スルタンの概念的理解に至る思考力・判断力・表現力等を問う良問であるとする評価もあった。

Cの問8では、絶対王政に関連した選択肢にすれば包括的な知識を問う問題になったのではないかと助言を受けたが、問9では資料から読み取った内容をもとにその後の出来事を推測させる良問であるとの評価を得た。

第3問

Aの問3は、読み取りを前提とする問題であるが、思考力・判断力・表現力等を問う良問と評価された。

Bの問5については、地理的な知識と地図上の情報を読み解く技能を組み合わせた良問であると評価された。

第4問

Aの問2は、歴史事象相互のつながりに着目して判断することが求められる点で良問であるとの評価を受けた。問3は、単純な事実的知識を問う問題となっていたので、今後は資料との関係性を高める工夫をしたい。

Bでは、問4および問5で下線部を用いない出題形式としたことが、「文章全体を丁寧に読み取らせる」問題であると評価された。特に問5は、ローマの衰退の根拠を「概念的に捉える力を求める良問」や「思考力と知識の両方を問う良問」とも評価された。いずれの小問についても、共通テストの問題としておおむね妥当であった。問6は知識だけでも解けるが、「概念的に啓蒙思想を捉えていることで正答にたどり着く」問題に発展しうる可能性があったので、今後の課題としたい。

第5問

Aの問1は、独裁体制の概念を問うものであるが、リード文の情報と知識の利用だけで解けるとの意見が出された。他方で、「独裁」の歴史概念を問うものとしては評価された。問2は、人権の歴史を問うもので、基本的知識を問うものと評価された。問3はリード文とグラフから複数の観点から思考させ、今後の高等学校教育で活かせるような資料であると高く評価された。

Bの問4が知識問題になっていると指摘された一方、問5は概念的理解を問う問題、問6は包括的知識を要する問題であると評価された。問5については会話文を問題に活用したとの指摘もあった。正答率を適切な値に保ちつつ、概念的理解を問う問題の作成に努めたい。

4 今後の問題作成に当たっての留意点又はまとめ

以上、問題作成部会として、各問の出題意図と、設問に対して寄せられた意見・評価に対する見解を述べてきた。最後に総合的な意見・評価についての問題作成部会の見解を述べ、問題作成に当たっての留意点についてまとめておきたい。

まず、分量としては試験時間に見合った適切なものであり、難易度は標準的であるとの評価を受けた。また、本試験との比較でも、その難易度は適切なものだった。出題のバランスについては、地域別では、ヨーロッパ・アメリカで63%ほど、アジアが27%ほどで全体の9割を占める。分野別

では、政治史と社会経済史が9割近くを占めた。地域別、分野別ともに、ややバランスを欠く印象があり、今後の問題作成において改善すべく努力したい。時代別では、古代・中世・近世が45%、近現代が39%、残りが複数時代の混合問題となっており、バランスは妥当であったと考えている。

全体的に、会話文の必然性や資料と設問の間に有機的な関連性に特徴づけられ、かつ歴史的思考力を問う意欲的な出題が目立ち、高等学校の授業づくりに貴重な教材やヒントを与える問題であるとの高い評価を受けた。本部会として、高等学校の世界史教育における授業改善に寄与できることを喜ぶとともに、今後とも設問のさらなる工夫に注力したい。

「世界史B」の学習指導要領・教科書のテーマに即した問題作成に細心の注意を払ったことは言うまでもないが、さまざまな指摘・意見を踏まえつつ、単純な知識問題に帰結することなく、基礎的な歴史知識を活かした歴史的思考に基づいて解答できるような、受験者の思考力・判断力・表現力等を測定しうる問題を作りたい。また、資料やリード文から読み取れる情報を基にして、既習内容から得られた包括的・概念的な理解を踏まえつつ、論理的に考察し構想することで正答にたどり着く問題を考案するよう、今後とも問題作成の改善に努めたい。